京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第十六卷　第四號

大正十二年四月一日發行

論叢

納稅義務者としての內藏……法學博士　神戸正雄

價値の類型と個性……法學士　恒藤恭

サン・シモン派の社會改造哲學及び連帶思想……文學博士　米田庄太郎

基督教文明の發展概論……法學博士　財部靜治

時論

天然資源の國際的開放の原則……法學博士　戸田海市

產業組合中央金庫に就て……法學博士　河田嗣郎

說苑

婚姻年齡の統計的研究……經濟學士　岡崎文規

雜錄

失業保險制度の推移……法學士　一戸二郎

生產者及び消費者としての露西亞……經濟學士　藤野靖

世界的貨幣問題とカッセル教授の學說……經濟學士　小川福太郎

獨逸高等官の生計費……經濟學士　岡崎文規

マックス・ウェーバーの論文集……法學士　山口正太郎

サン、シモン派の社會改造哲學及び連帶思想（二）

米田庄太郎

三　『サン、シモン說解說』の根本思想

本書は主としてバザールの手になれるものであるが、併し其の內容は彼がアンフアンタンを始め、其の他の首領等と共に考究したものを述べたので、當時のサン、シモン派全體の主要思想を發表せるものと認められるのである。以下其の根本思想を簡單に說述することゝする。

今歐洲の諸國民は混亂を極めたる狀態に陷り、吾人の時代は實に不幸な、悲慘な時代である。而して今日世に存する何れの宗敎も何れの哲學も、吾人を救ふ力を有しない。然らば人類社會は今日見るが如き狀態に、永久に沈落すべき必然的な運命を有するか。決してそうでない。人類にはより高等な、より神聖な一の運命或は使命がある。而して之を實現せんとする力は、之を表現する其の法則を眞に確信する心から、自から迸出するのであるが、其の法則は實にサン、シモンによりて發見されたのである。然らば其の法則とは如何なるものであるか。夫れは單純であるがしかも總てを支配するものにして、簡明に說述すれば左の如きものである。

人類(リコンニテ)は自から發達する一の集團的實在(un être collectif)である。此の實在は其の生理的法則たる一の法則に從ふて生長した。而して其の法則とは卽ち一の進步的發達の法則(la loi d'un développement progressif)である。

併し人類がかゝる法則に支配されるものならば、如何にして今日見るが如き、混亂、矛盾の狀態が生じたか。之を理解する爲めには、吾人は更に深く考究せねばならぬ。

夫れ各個人の行動、作業と同じく、世界生活の各形成の根柢に存する二つの力がある。夫れは個性の力と統一の力とである。而して個性の力、或は原理は利己主義として發動し、一切の衝突矛盾を生ずる。若し之れに對抗する他の力、他の原理が存しないならば、世界其の物は一の矛盾にして、之を造れる神は背理、無意味であるであらう。併し個性の原理に對抗する、又夫れよりも有力なる此の一原理は、現實に存在する。夫れは統一(リユニテ)の原理、共同團結(アツソシヤシヨン)の原理である。是れ個人に於ても、國民に於ても反對を征服し、總てのものゝ同胞化を導かんと努力する力である。今右の二つの力、二つの原理が世界を形成するので、吾人は世界の何れの方面に於ても、此等の二原理、二力が彼等に特有なる現象に於て發動するを見るのである。

統一の原理の作用として、社會の形成される有機的諸形體を考察するに、此處に統一の最初の形態は家族である。家族は粗野なる自然狀態に於ける唯一の團結である。而して夫れより團結は

地方團體に進み、其の中には多數の家族が相結合して一全體をなす。更に幾多の地方團體が漸次に結合して一の國家をなす。而して最後に人類の最高の統一たる國家聯合が現はれ、夫を以て團結は完成し、今や一の普遍的或は世界的團結(une association universelle)が成立するのである。併し此の團結の發達と相伴なふて反對、衝突も亦發達する。吾人は何れの方面に於ても、團結の中に又團結の間に反對、衝突が烈しく行はれて居ることを見るので、團結は唯見掛上の現象に過ぎざるものゝ如くに思はれるのである。而して今反對及び團結の本來の意義と共に、両者の不一致を除去する手段を覩破し得る爲めには、吾人は世界史を其の全體に於て考察せねばならぬ。

夫れ諸國民の歴史は、二つの時代の絶へざる交代を敎ゆ。其の一は有機的(組織的)時代にして其の二は批判的（破壞的）時代である。而して有機的時代に於ては構成的要素は、破壞的要素を征服し、人類は夫れ自身に於て一の本分或は使命の意識を有し、總ての人々の社會的行動は無意識的に有機的形成の色合を呈して居る。敎育及び立法は一の共同的目的に對して行なはれ、同一の思想が總ての人々の心を支配し、利己心の衝突は消失して、總てが一全體に於て有機的に結合する。而して人類統一の此の發現は國家である。國家に於ては憲法は形式にして、施政と服從は其の條件である。併し人間の意識は間もなく、社會の此の形態に對する高等なる基礎を求める。夫れは單に人間的なるもの以上に上る。是れ社會の右の形態は、人間によりて生起せるものでなく、

只人間を通じて生起せるものであるからである。而して其の高等なる基礎と云ふは神の意識、卽ち此の國家、此の社會は神自身によりて建設され、夫れ故に不可侵的であらねばならぬと云ふ信仰である。されば宗教的であると云ふことは、有機的時代の本質的特性である。是れ宗教は總てのものに對する、基礎及び出發點であるからである。而して宗教的信仰によりて、社會的總合(la synthèse sociale)が實現されるのである。

批評的時代は夫れと正反對な特性を表はす。有機的時代の基礎たる神の意識の表現はドグマ(教義)であるが、個人意識が其の時代の教義を疑ひ始めることによりて、總てを結合する紐帶を緩め、個人の生活からも、亦全體の生活からも、統一と幸福とを可能ならしめる唯一の力たる其の最高な、最内部的な信仰性を取り去る。而して夫れよりして個人主義はあらゆる方面に於て跋扈する。されば批評的時代は本來反宗教的であるのである。愛と服從は國家より消滅し、其等のものに基いて建設されたる眞の神的な國家組織、卽ち眞實なる社會的位階制(la hiérarchie Sociale r'ele)は崩壞し、私利心、利己主義は至る處に跋扈し、瓦解、混亂が一般に現はれてくる。併し此の時代の特性が極端に發揮されるに至ると、此處に强大なる反動が起りて、有機的生活及び構成的宗教が再び現はれてくるのである。

右の有機的時代と批評的時代との連續的交代は、啻に個々の國民の歷史に於てのみならず、又

世界史全體に於ても行なはれる。希臘に於て、ソクラテス前に一の有機的時代があつた。其の時代には總ての人々は多神教を信じて居た。併しソクラテスの時から、北蠻の侵入に至るまで、永い批評的時代が續き、其の間に古代宗教は段々に破壞され、夫れより又一の新しき有機的時代が現れた。夫れは中世紀である。此の時代にシャルマニユとグレゴアル第七世とによりて建設された歐洲社會は、同質的な一全體を形成した。併しルーテルによりて開始された近世批評的時代はガリレー、ベーコン、デカールト等によりて繼續され、而して千七百八十九年の大革命に於て、大に其の特性を發揮した。そこで今や新しき有機的時代を切望する徵候は、明らかに現はれて居る。而して此の新しき有機的時代の福音を說いたのは、實にサン、シモンであるのである。

歐洲史上宗教生活の方面に於ける、有機的時代と批評的時代との連續的交代の大勢は、右に述べしが如くであるが、更に夫れと同樣に重要なる物質的生活に於ても、兩時代の交代が行なはれる。但し物質的生活に於ては、是れまでは主として反對が支配して居たのであるが、今や共同團結或は社會的總合が、熱誠に求められて來たのである。

併し反對は單に國家、國民、及び宗教等の間に行なはれるのみならず、又個人の間にも行なはれる。而して個人の間の反對は、其の最とも粗野な形態に於て、歷史の始まると同時に現はれた。併し夫れは敵の生命と共に終る單なる鬪爭であつた。然るに勝者は、敗者を殺すことは彼を勝者

とならしめるが、併し支配者とならしめないことを、間もなく覺つて來た。そこで敗者を殺さずして、其の自由を奪ふことゝした。夫よりして吾人の現代の特性たる、人間によりて人間を使役(絞取)すると云ふこと(l'exploitation de l'homme par l'homme)が起つたのである。(但し今日社會主義思想や勞働運動に於て、汎く一般に使用される、此の「人間によりて人間の使役或は絞取」と云ふ語は、サン、シモン派の新造語であるのである。)而して此の「人間によりて人間の使役或は絞取」のとれる最初の形體は、奴隷制度である。奴隷制度は基督教によりて廢止されたが、併し基督教は之れに替へて、隷民制度を發達させた。而して此の隷民制度を全廢したのは佛國の大革命である。

佛國大革命によりて隷民制度は廢止され、此處に近世の勞働者は生れたが、併し「人間によりて人間の使役、絞取」は、夫れによりて全廢され、人間の平等が眞實に確立されたと云ふに、決してそうでない。なるほど法律は勞働者に自由を與へた。併し勞働者は尙ほ「彼の貧乏、彼の困窮の奴隷」である。而して此の結果を導きたるは產業に於ける反對衝突である。今や產業に於ても、宗教に於ける如く、總てに途と目標とを示す處の統一、共同的思想及び計畫は缺けて居る。之れに反して競爭に於て最とも完全なる紊亂、貧富の鬪爭、强弱の鬪爭が行なはれ、「人間によりて人間の使役、絞取」は、此處に其の全體に於て實現されて居る。併し近世產業界に於ける、

此の「人間によりて人間の使役、絞取」は、以前の時代に於けるとは、目的を異にして居る。夫れは個人が自由に處分する絶對的權利を賦與されたる私有財産を、獲得し集積する爲めに行なはれて居るのである。而して夫れが實に現代の衝突、紊亂の根本原因であるので、現代の財産制度が改造されない以上は、其の紊亂は決して除去され得ないのである。又現代の衝突によりて、最とも多く苦められて居るものは、勞働者階級であるが、然るに勞働者階級は國民の大部分を占むるものであるから、此處に社會改造の事業は先づ「最多數な、又最貧な階級の道德的、智力的及び物質的存立の絶へざる改善」を圖ることであらねばならぬ。而して夫れは、根本的には財産制度の改造によりて可能となるのである。要するに現代財産制度の改造は、新しき有機的時代の物質的生活を確立する根本問題である。

夫れ財産に關する今日の根本的謬見は、現代の財産權を絶對的な、全く必然的な、不可變な一權利と見ることである。然るにかゝる見解の謬妄であることは、歷史に一瞥を投ずれば直ちに理解されるのである。歷史は如何に各社會的大改革は同時に財産制度の一改革であるか、又如何に財産權が其の主體から漸次に離れて行くかを示して居る。啻に財産權の主體が、常に益々狹小する社會圈に、漸次に縮小するのみならず、又其の轉移の仕方が單純化されて居る。しかも今尙ほ一の重大なる進步は、成就されずに居る。總ての財産は今尙ほ常に家族の財産にして、家族の成員

が死するも、尙ほ家族から離す可からざるものとして考へられて居る。されど時代の進歩は官職の世襲を廢せることによりて、財産の家族的世襲の廢止と云ふ、此の最大社會問題の解決に對する眞の方法を指示して居る。夫れはつまり血族の相續權の代りに功勞或は才能の相續權を制定することである。而して兩者の媒介となるは、個人の死に際して彼の家族ではなく、國家が彼の遺産の相續者となると云ふ原則である。

吾人が國家生活の方面に於ける出生の特權を廢止し、各人をして只彼自身の重要、彼れ自身の勞力及び才能によりてのみ、公的生活に於ける地位に就かしめる以上、財産の相續によりて生ずる出生の特權が、社會の方面に於て存立せねばならぬと論ずる理由は存在しない。財産の世襲は官職の世襲ほど特權ではないと論ずる人はあるまい。官職の世襲が廢止されたと、まさしく同一の理由によりて、財産の世襲は當然廢止されねばならないのである。併し夫れは財産制度を全廢すると云ふ意味ではない。財産權其物は保持されべきである。只財産に對する出産權のみが、廢止されねばならないのである。財産を獲得する可能性は、人間から奪はれてはならぬ、否な制限されてもならぬ。只財産に關する權利のみが改造さる可きである。廢止さる可きは能力の權利に基く財産ではなく、出生の權利に基く財産である。相續財産は反社會的である。是れかゝる財産は企業の所有者と勞働者との間の紐帶を作らないからである。只獲得されたる、或は勤勉努力に

よりて得られたる財産のみが眞の財産である。能力或は才能は强者の權利及び出生の特權に代はる新しき權利である。財産相續權を有するものは、只國家だけである。而して國家は此の權利によりて、勞働者の共同團結（アソシヤシヨン）を作る爲めに、一切の手段の所有者となるのである。

併し右に述べしが如くにして、相續財産が廢止され、純個人的財産が設定されるとすると、富の新分配は如何にして行はる可きか、其の原理は何であるか。夫れは卽ち「各人に對しては其の能力に應じ、又各能力に對しては其の作業に應じて」と云ふことである。此處に新しき社會的總合の有機的原理が見出され、現代の謎が解かれるのである。而して今其等の原理が、依て以て實際的生活に於て實現される外部的制度は、全國に行き亘る一の銀行系統である。財産所有者が死亡する時は、其の財産は總て銀行に移される。而して銀行は人々の財産狀態を能く調査するのみならず、更に財産を最ともよく利用するに、最とも適當なる人々を見出さねばならぬ。是れは甚だ困難である。しかも之をなすのが卽ち銀行の任務である。かくて銀行は社會の各個人の有する價値及び占むべき地位の、審判者となるのである。

今新しき社會的總合が成立する爲めには、財産制度は右に述べしが如くに改造されねばならぬが、併し夫れが持續的に發達し得る爲めには、教育は改造されねばならぬ。今日では教育は甚だ輕視されて居る。而して其處には何處にも見ない程の衝突が一般に行なはれて居る。併し教育は

重大なる一の社會的豫見の收獲、重大なる一の政治的機能の目的物として考へられねばならぬ。而して教育は二つの部分を含むべきである。其の一は一般的或は道德的教育にして、他は特殊的或は職業的教育である。前者は說教及び懺悔を伴なひ、人々をして其の仕事を愛せしめ、此くて人々に眞の自由を確保せしむることを目的とする。而して後者は職業を決定し、各人をして其の能力を充分に發達させ、彼に最ともよく適する地位を占めしむる爲めに準備するものである。尙ほ新しき社會的總合の發達に對して、立法の改造も亦教育の改造と共に必要である。法律はよろしく益々刑法的性質を失なひ、只進步を促がす爲めにのみ制定さる可きである。

されど此の新しき社會的總合の最高の權威にして、又最根本的基礎をなすものは、宗教である。宗教も亦世紀の進行中に段々完成して來た。現物教、多神教、一神教は相續で現はれた。併し人類は更に新しき、最とも完全なる宗教を要する。夫れは一切の人間的觀念の總合であらねばならぬ。夫れは只人間性の一方面を偏重して、他の方面を犧牲にするものであつてはならぬ。將來の社會組織ばかゝる宗教を基礎とし、又最高の權威として確立されねばならないので、夫れは政治的組織であると同時に、宗教的組織であらねばならぬ。

然るに基督教はかゝる宗教ではない、隨ふて將來の社會組織の基礎となることは出來るい。基督教は物質を呪ひ、肉を靈の爲めに、產業を神學の爲めに犧牲にして居る。基督教は二元主義に

基いて立てられたるものである。併し新しき宗教は一元主義的であらねばならぬ。神は一である。神は存在する總てある。總ては神に於て存し、總ては神によりて存し、總ては神である。其の生々活動する統一に於て顯現する神、即ち無限な普遍的な實在は、是れ無限な普遍的な愛にして、其の愛は靈として又物質としての二方面、或は睿智として又力として、智惠として又美としての二方面に於て表現する。而して此の新しき三位一體は、社會的生活に於ては、學問、産業及び宗教の三位一體によりて現はれる。宗教は愛が靈と物質とを結合するが如くに、産業と學問とを結合するのである。

宗教は最とも藝術的な、最とも感傷的な、最とも愛の强烈な性質を有する人によりて指導さる可きである。而してかゝる人は最高司祭であるであらう。學問も亦産業も、同樣に各々長者を有するであらう。併し彼等は共に最高司祭の補助者及び從屬者であるであらう。最高司祭は彼等の各々に其の地位及び仕事を指定する。總ての人々は社會の公吏にして、各人の職務は神聖である。今日では法律は一の神秘的な偶像、紙の一片によりて表はされたる一の抽象物であるが、將來の社會に於ては最高司祭は總ての人々に愛される生きた法律であるであらう。其の求心的と遠心的との二重の方面、即ち自愛と他愛との二重の方面に於て現はれる愛、是れ即ち將來の社會の位階制の基礎、吾人が自から願望する權威と服從との根本理由である。

主としてバサールの手になれる「サン、シモン說解說」の根本思想は以上述べしが如きものであるが、今之を「生産者」の根本思想と比較すると、吾人は先づ其の哲學的原理に於ては、根本

的には異なつてゐないが、併し一層詳しく展開されて居ることを見る。更に「生産者」にありては、宗教は全く觀過されて居て、只實證哲學的思想が説かれて居るだけであるが、本書に於ては宗教は哲學以上に立つものとして甚だ重要視されて居る。是れ本書と「生産者」との間に存する最も著しき差異である。而してかゝる差異の生ぜるは、是れ前節に述べし如く、「生産者」の廢刊後、主としてアーゼヌ、ロドリギユスの努力と、當時の思想界の形勢の影響とによりて、サンシモン團體の中に、大に宗教的傾向が發達したからである。併し本書の最とも著しき特徴は、其の社會經濟的思想に於て發揮されて居るので、サン、シモン派の社會經濟的思想は、本書に於て大成され確立されて居ると認め得られるのである。而して後の社會思想の發達に及ぼせるサン、シモン派の影響は、主として本書の思想に基いて居るので、されば近世社會哲學史、近世社會思想史の著作に於て、サン、シモン派の説として論述されて居るものは、さきにも述べし如く、主として本書の思想である。吾人は本書に於て、サン、シモンの思想が始めて社會主義説として發展されて居ることを見るのである。されば社會主義思想の發達を研究するだけの目的にて、サンシモン派の思想を研究するに於ては、本書の思想を研究すればそれで充分であると思ふが、併し余は本論文に於ては、サン、シモン派の思想の發達の全體に於て、社會連帶思想が如何に發達して居るかを考究するを、主眼として居るのであるから、更に本書出版後に於てサン、シモン派の思想は如何に發達し、又其の中に社會連帶思想は如何に展開されて居るかを調らべて見たいと思ふのである。（未完）